期の反米思想を、キューバのホセ・マルティとウルグァイのホセ・エンリケ・ロドーを対比させながら、手際よく叙述したものである。同氏によれば、エリート主義的で観念的なロドーの反米思想にたいして、マルティのそれは、生活体験に裏打ちされ、一般民衆に根ざすものであった。

もう一篇の研究ノートである三橋論文は、メキシコ近現代史を専攻する評者にとって、もっとも示唆に富むものであった。三橋論文は、メキシコ中産階級の起源・発展を一九一〇年代のメキシコ革命以降に求める通説に正当にも疑問を提起し、これまでの研究成果の整理・統合をこころみつつ、「現在との関連でメキシコ中産階級を分析するためには、ポルフィリオ期〔一八七七～一九一一年〕以降のその形成と発展を考慮すればよく、それ以前におけるメキシコ中産階級については、ほとんど重要性を持たないであろう」という暫定的結論に到達する。

ただ評者にとって疑問に残るのは、三橋論文が「中産階級」を〈階級〉概念として扱っているのか、それとも〈社会階層〉概念としてとり扱おうとしているのか、必ずしも明確とはいえない点である。「社会セクター」という用語の併用とともに、気にかかった。もう一点は、ポルフィリオ期以前を切り捨てうるのかどうか、というためらいを感じる。一九世紀メキシコ史研究の重点がポルフィリオ期からそれ以前の時期に移行し、たとえば Ciro F.S. Cardoso ed., *Formación y desarrollo de la burguesía en México: Siglo XIX* (México: Siglo XXI, 1978)（『メキシコのブルジョアジーの形成と発展』）のような成果が生まれつつある今日、さらなる考察が必要なのではないだろうか。

ともあれ、『LA研究』発行にたずさわる一人として、『イベロアメリカ研究』の今後の発展に期待したい。

（B5判　一〇〇頁　一九七九年七月刊　上智大学イベロアメリカ研究所　年間購読料二四〇〇円）

（青木芳夫　奈良大学講師）

Daniel T. Rodgers, *The Work Ethic in Industrial America 1850–1920*

明確で緻密な分析力と流麗な文章で書かれた本書は、思想史が最も活力を帯び、有効となるところ、即ち、思想が現実と切り結ぶ接点に焦点を合わせ、産業革命に直面した伝統的労働倫理という理念の行方を追求した思想史の傑作である。

著者によれば、一九世紀中葉の合衆国北部において受容されていた労働倫理は、工場制と固定した賃金労働者階級を基軸とする経済よりも古く、又、それとは明白に異なった、前産業資本主義的経済に基づいたものであった。それは、有用性、自己抑制、成功の夢、そして創造性の四つの要素から構成されていた。即ち、労働は、経済的欠乏の世にあって人々を有用にし、怠惰が生みだす疑惑と誘惑を払拭し、努力に応じた富と地位への道を拓くものであった。さらに、労働は、人間がその知力と熟練技能を

発揮し、生産物に結実させることを可能にした。これらの要素はいずれも、労働は道徳的生活の根本であるという労働倫理の中心的前提を支えていたのである。

この労働の称賛は、合衆国北部における、中層の、主としてプロテスタントである財産所有階級（農民、商人、独立した熟練職工、牧師や専門職につく人々、そして、初期の産業資本家）、特にプロテスタント・ブルジョワジーの間で最も強力であった。又、それは、彼らの階級的産物であったが、同時に、彼らが持つヘゲモニーの故に、一般的信条ともなっていた。

著者は、この伝統的労働倫理に対する新しき現象としての工場制の衝撃を分析し、労働そのものが根本的な変革を被る時、以上の如き労働の諸価値は一体どうなるのかを見事に追求する。即ち、一九世紀後半において、工場制は、農場と仕事場（ワークショップ）中心の牧歌的経済に侵入し、労働倫理の諸前提に挑戦し、労働とモラルの安易な等式を破壊していく。仕事が、能率を求めて、分割され、単純化され、一定の型にはまったものとなるにつれて、又、個性発揮の場が狭められ、熟練技能が消滅するにつれて、技術と仕事、創造性と労働、自己と仕事の間にくさびが打ち込まれる。工場がより大きい規模をもち、組織化されるにつれ、そして、より多くの人々が従属的な被雇用者となるにつれて、普通の労働者が経済的独立を獲得する可能性は着実に後退していく。さらに、工場が大量の生産物を家庭と市場に供給するにつれて、全ての労働者の惜しみのないエネルギーが切実に必要とされているという確信がゆらぎ、娯楽、休息、そして努力そのものから自由な生活という、労働倫理とは正反対の規範が拡大していく。

かかる傾向を憂える北部の「モラリスト達」は、一連の手段、即ち、生産者協同組合、利益分配制、出来高払い制、そして科学的管理を通じて、働く者の独立、成功、自己決定権を維持しようとし、又、彼らの視野の拡大、労働時間短縮等を通じて、機械化された労働の単調さと疎外感を克服しようとした。しかし、工場制下の労働と労働倫理を調和させようとするこの真剣な努力は、失敗と妥協に終らざるを得なかった。

しかしながら、著者は、労働の理想と工業化の現実との亀裂にもかかわらず、北部の人々が労働倫理を現実から引き離し、修辞上の、又は、道徳的な決まり文句、政治的修辞として、一層その理想に固執した、と主張する。例えば、「真の」労働を行なっていると自負する工業労働者達は、「労働の尊厳」の名の下に、自らの苦痛にみちた境遇を訴え、労働倫理を労働者の伝統に転化していった。他方、保守派は、財産が勤勉を前提とするが故に、貧困は怠惰という悪徳の証であると主張し、労働倫理を保守的信条として投げ返した。こうして、労働倫理の履歴は蹉跌と同時に存続をも示すものであった。著者は、又、かかる経緯を子供向けの小説とフェミニズムの中にも確認する。

以上が本書の簡単な紹介である。思想と現実の緊張関係を常に念頭におき、精緻な分析力で書かれたこの労作に対して、筆者は何ら不満をもたない。そして、読了後、著者と共に、次の如き憂うつな感慨を持た

ざるを得なかった。喜びと満足を持ちうる労働とは一体どのようなものなのか、と。憂うつなのは、この問いには依然として解答が与えられていないからである。ともあれ、社会思想史の傑作である本書をできる限り多くの人々が読まれんことを切望する。

（二八七頁　一九七八年　Chicago, The Univ. of Chicago Press）

（竹田　有　京都大学大学院生）

E. Juillard et H. Nonn (eds.): *Espaces et Regions en Europe Occidentale, structures et dimensions de regions en Europe occidentale*

本書はルイ・パストゥール（ストラスブール）大学名誉教授の E. Juillard と同大学教授の H. Nonn をディレクターとする西ヨーロッパにおける地域空間に関する共同研究グループの研究成果をまとめたもので、このメンバーには彼らの他、H. Reymond, R. Kleinschneger, S. Rimbert, M. Pruvot, C. Cauvin の五名が参加している。

このグループのリーダーであるジュイヤールは現代フランス地理学界を代表する地理学者の一人で、長らく「地域」ないし「地域空間」に関する研究に取り組んできた。本書は、このジュイヤールの規定する「地域」概念並びに彼の提唱する「地域空間の一般地理学（La géographie générale des espaces régionaux）」の枠組の中で、西ヨーロッパにおける「地域」を経験的及び理論的に分析したものである。ジュイヤールの定義する「地域」とは機能空間としての地域、つまりある中心、ある都市によって組織づけられた空間を意味し、それは機能空間の階層でいえば、国家空間より一段階下位に位置づけられる土地的枠組をもつ空間を指す。

ところでこのような地域概念の立場から行なわれた地域研究は、一九六〇年代以降、A. Thibault, B. Dézert などのモノグラフをはじめ、既にかなり多くの蓄積をみてきた。にもかかわらず、総じて機能空間としての「地域」の一般化ないし体系化を志向する動きは極めて少なかった。ジュイヤールの標榜する「地域空間の一般地理学」はまさにこの点を目指そうとするものであり、本書は先述した如くこうした研究の一貫をなすものである。即ち本書の目的とするところは、西ヨーロッパにおける諸地域の発生、構造化並びにディメンションはある一定の論理、面積、人口、都市網に関するある一定の規範に対応しているかどうか、つまり西ヨーロッパの諸地域に存在する gabarit は一つなのか、それとも多数あるのか、それを見極めることであった。

本書は序論以下大きく三部から構成されている。第一部「西ヨーロッパにおける同質範域の画定」では、第二、三部での理論的及び経験的方法による地域の gabarit の検討に先立って、その基礎作業が行なわれる。著者たちは先ず各地域の gabarit はそれの属する空間タイプとそれぞれ対応関係にあると仮定し、西ヨーロッパ内部における空間タイプを抽出するために、都市の分布状態(semis urbain)、人口密度、産業活動、人口推移、交通機関の五つを指標にとり、その地図化から同質範域区分を行なう。